

中国と琉球の国交

— 朝貢外交の確立 —

東 喜 望

1

明代、福州の長楽で生まれた謝肇淛^{しゃちやうせい}は、万暦20年（1592）進士となり、湖州推官から工部郎中にうつり、のち広西左布政使として善政をなしたことで知られている人物である（生没年未詳）。

彼は、その著『五雜俎』巻四で、当時の中国と、いわゆる外夷との関係にふれ、次のように述べている（以下、句読点及び一部訓点補=東）。

夷狄ノ諸国莫^レ礼^ナ義^{ナル}於朝鮮^{ヨリ}、莫^シ膏^ニ腴^{ナル}於交趾^{ヨリ}。莫^ク悍^ハ於韃靼^{ヨリ}、莫^シ狡^{ナル}於倭奴^{ヨリ}。莫^ク醇^ハ於琉球^{ヨリ}、莫^シ富^ル於真臘^{ヨリ}。
其他^ノ肥磽不^レ等^{カラ}。柔獷相半^ス。要^ニ其叛服不^レ足^シ為^ス中国^ノ之重軽^ニ。惟有^リ北虜南倭^ノ震^テ鄰^ヲ可^レ慮^ル。其次^ノ則^チ女直^{ナラフ}耳¹⁾。

明代末期に生きた地方高官だけあって、いわゆる「北虜南倭」に苦しめられた、明国の国際状況を鋭く衝いた一文である。文中の韃靼とはモンゴル。倭奴とはいうまでもなく、日本。交趾は今の北ベトナム、真臘はカンボジア、女直（女真とも）とは今の満州から沿海州辺りをさす。

つまり筆者は、交趾や真臘など南海諸国の豊饒を示すとともに、当時の中国が、北からはモンゴル（オイラート・タタールなど）侵入の、南からは倭寇進出の脅威にさらされていることを指摘しているのである。さらにいえば、最も親交の深い国として、朝鮮と琉球をあげていることも注目すべきで、事実、両国は、すでに朝貢・冊封関係にあり、密接な国交を結んでいたのである。

同書はまた、当時の中国の国交関係について次のように記している。

国朝洪武^ノ初^ニ四夷王会^ノ図共^ニ千八百国^ニ。即^チ西南^ノ夷經^テ哈密^ヲ而來朝^{スル}者^ハ三十六国^ニ。永樂中^ニ重^ク詔^{シテ}而至^ル又十六国^ニ。其中如^キ蘇祿蘇門答刺彭亨瑣里古里班卒白葛達呂宋之属^ノ二十余国皆前代^ノ史冊^ニ所^レ不^レ載^セ者^{ナリ}。漢唐^ノ盛時所^レ未^レ有^ル也。然^{シテ}其中惟^テ朝鮮琉球安南及^チ朶顏三衛^ノ等^ハ受^テ朝廷^ノ冊封貢賦^ヲ。惟^テ謹^テ比^テ於藩臣^ニ。其他來^レ則^チ受^テ之^レ不^レ至亦不^レ責也。可^レ謂^フ最得^テ馭^{スル}夷^ノ之礼^ヲ2)

これによってわかることは、モンゴル族を北方へ駆逐して築かれた明国が、16世紀後半

には、アジアの広域にわたる国々と朝貢関係（外交関係）を結び、一大帝国を成していたということである。つまり、上記によれば、シルクロード天山北路にあるハミ（哈密）よりさらに西域の36国が洪武帝の時代（1368-1398）に新たに朝貢関係を結び、永楽帝のころ（1402-1424）には、さらに重訳の国16国がこれに加わったという。これらの国の中でも、スル（蘇祿）・ルソン（呂宋）・パナイ（班卒）＜以上、現フィリピン＞、スマトラ（蘇門答刺）・パハン（彭亨）・カリカット（古里＝インド半島西南岸）など20国余りが明代に初めて中国と国交を結んだという³⁾。たとえば、洪武・永楽年間にしばしば彭亨が入貢したことは、『明史』彭亨伝に記されている。

このように、明が国交を結んだ地域は、東アジア一帯から東南アジア・インドにまで及んでいるが、この外交の拡大は、永楽帝の数度にわたる北方遠征や雲南・安南の討伐、鄭和の7回にわたる南海への遠征などによって成功をおさめたのはいうまでもない。周知のように、永楽帝の命令によって、鄭和は大船団を率い、今のベトナム・カンボジア・タイ・スマトラ・ジャワをはじめ、セイロンやインド半島西南部を経て、アラビアからアフリカ東部にまで至り、諸国に明の建国を告げ、明への服属と朝貢を促したのである。

このように、古来中国は、いわゆる朝貢貿易によって、その威力を海外にまで及ぼしたのであるが、明代のそれは、民間の自由な海外貿易を禁じ、あくまで朝貢という形式をとった官営の貿易であった。洪武帝のとったこの海禁政策（のち200年間実施）が、倭寇を跳梁させる結果をまねいたことは、すでに説かれているところである。

ともあれ、このような外交政策と専制政治によって、明国が巨大な独裁的君主国家にのしあがったのは事実⁴⁾で、前掲の『五雜俎』によると、元代1000国余であった朝貢国が、明代には1800国に増加したという。

おそらく、上掲の記事は、前述のように明代末期の17世紀前半の状態を記したものであるが、この膨大な朝貢国の中でも、中国に臣下の礼をとり、皇帝の冊封と貢賦を受けたのは、僅かに、朝鮮・琉球・安南（現・ベトナム）・朶顔（現・内モンゴル）・三衛（建州・海面・野人＝現・満州）にすぎなかったという。

朶顔・三衛を重視したのは、明らかに、北方夷族の侵入に備えたものである。琉球も亦、中国にとっては、両シナ海一帯と「狡ナル倭奴（日本）」に対する拠点として重要な位置をしめたのであろう。さればこそ、琉球王国は、中国の庇護のもとに、15世紀前半から16世紀後半にかけての約150年間に、凡そ計100回にわたる南方諸国との貿易もできたのである。

2

ところで、冊封とは元来、中国の皇帝が詔（みことのり）を以って、諸侯に封祿や爵位を授けることである。漢代に始まったという。この詔を奉じて封爵を授けるために使わされた使節が冊封使である。冊封を受けた諸侯は、当然その謝恩のため朝貢する。

このように、当初は、国内の君臣関係を明確にし、国家の秩序を保つために機能したのが冊封体制であったが、やがてこの君臣関係は周辺諸国との間にも結ばれるようになり、殊に14世紀半ば（1369年以降）、明の洪武帝が日本をはじめ海外諸国に朝貢を促すに至って、この体制は一段と強化される。

つまり、洪武帝は朝貢した国に頒賜し、時として、その国の王位を承認することによって政治的友好関係を保とうとしたのである。このような朝貢・頒賜という外交は、同時にまた物資交換の貿易でもあったわけで、洪武帝は、宋・元代にも、市舶司の置かれた寧波と泉州・広州の三港をこの朝貢（進貢）貿易の基地として海外に開いたのである。

今、その跡を訪ねてみると、当時の面影はほとんどないが、その位置を確認することができる。浙江省寧波の旧港は、姚江と奉化江が合流し甬江へ流れこむ起点のあたりである（写真1）。市の中心部にあたるこの地点は、広い湖ようになっており、遣唐船以来、往昔の日本船はここに停泊したという（図1・参照）。『浙東名城・寧波』⁵⁾によれば、三江の合流するこの地に発達した町（城邑）が、正式に鄞県として設置されたのは、秦代の紀元前222年。唐代には明州といい、対外貿易の主要港の一つとして発達し、朝鮮・日本・東南アジアの商船が頻繁に來航し、宋代には遠くカンボジアや占城・ジャワ・サラセンなどから交易船が往來したという。

明代には、市舶提挙司のほか、提挙庫・海倉館・税課司が設置され、外国使者のいわば迎賓館である嘉賓館も設けられている。このような外国の使者のための宿泊所も、往昔はいくつかあったと思われるが、今はただ高麗使者の館の跡が存在するのみである。ただし、これも位置を示す標識⁶⁾が存在するのみでその遺構は全くない（写真2）。

清代に至ると対外貿易は、いわゆる典札問題に関連して厳しい制限が加えられ、寧波港も乾隆24年（1759）、対外貿易港としての機能を全面的に閉ざしている。三江合流地点の南北の方向に、現在、新江橋がかけられているが、その南岸（現・公園）が往時の船舶の荷揚げ場で、対岸（北岸）一帯はアヘン戦争以後、英国の租界だったという。

福建省泉州は、マルコ・ポーロの船出した地として、つとに有名であるが、三国時代末の260年、この地に東安県（晋の太康3年=282年、晋安県と改称）を置いたのが、その行政的な始まりだという。その後、唐代（7世紀）には中国最大の対外貿易港が開かれ、宋・元代（12～13世紀）には、海のシルクロードの出発点となり、世界の二大貿易港として栄え、多数のアラブ人やペルシャ人・アジア人（商人・宣教師・旅客など）が來住し、1万人以上の外国人が居留していた時期もあるという。その交易地は、東南アジアやインドをはじめアラビヤ半島やアフリカ・地中海の沿岸にまで及んでいる⁷⁾。今になおその子孫が在住しており、イスラム寺院やキリスト教教会が残されているのもそのためである。

泉州に市舶司が設置されたのは北宋時代の1087年（文献通考）。明代には、永楽帝即位後、これが強化され（1403年、市舶司再設）、泉州は鄭和遠征の寄航地としても栄えたが、1469年（『福建市舶提挙司志』による。『八閩通志』では1472年）、市舶司が福州に移されたために、対外貿易も衰微し、清の乾隆には海外との交通を閉ざしている。

既に別誌で述べたこともあるが、かつて国際貿易港としての殷賑をみせた泉州港は、現市街地南の晋江（幅約1km）一帯であつたろうと思われる。この晋江に面した、泉州城府の旧南門をぬけ、東へ300mほど行った所に南北につらなる長い堀割りがあつた。この辺り一帯が諸外国からの來航者が集う明代の來遠駅だったという（ただし、1472年廃止）。史跡標示の石碑が建てられている⁸⁾。ここから西へ100mほど戻り右折すると聚宝街で、その北方約1kmのところ天妃宮（1196年創建）がある（図2）。聚宝街はかつてのイスラム人街。天妃は、天后・媽祖ともいい、いうまでもなく海上航行の守護神である（写真3）。

広東省広州も、中国の南の玄関口として、泉州同様、古くから栄えた国際貿易都市である。路平編著『広州風物』⁹⁾によれば、この地に小城府が築かれたのは、西周の夷王8年(紀元前・約887年)ごろだという。これを楚庭という。その後、秦代に南海郡が置かれ、晋代から南北朝(3世紀後半～6世紀後半)にかけての300年間に大きな発展を見せ、この時期に海外交通の門戸も開け、印度や錫蘭(セイロン)・克什米尔(カシミール)から高僧が渡来し、王園寺(現・光孝寺)や西来庵(現・華林寺)を建立したという。だが、広州が最も対外貿易の都市として発展したのは、唐・宋時代で、例えば唐の大暦5年(770)には、広州港に4000余艘の船が集い、いわゆる蕃坊(外国人居留地)には、10万人の外国商人が居住したという。かくてアラブ人は、この居留地に懐聖寺という寺院(イスラム教)を建立する。宋代には、市街地を拡張し新たに東・西に城府が造成されると、この新開地のうち西城が最も繁華街になったという。明の洪武帝も南の関門として広州の拡充につとめ洪武13年(1380)、鎮海楼が建てられたと記している。楼の名は、海(珠海)を鎮めるという意味である。

ところで、上掲では、広州が印度やアラブ諸国以外にどこの国と交易していたかがほとんど明らかでない。だが、唐代(750年ごろ)、この地を訪ねた鑑真和上の語ったところによっても、婆羅門(インド)船や波斯(イラン)船・崑崙(東南アジア)船が江上に無数に停泊していたことがわかり、しかも蕃坊にはスリランカやアラビア・クッタル人などが居留していたことが確認できる。また、当時広州には、イスラム教寺院のほかにも、バラモン教の寺院が3箇所もあったようである¹⁰⁾。

このように、唐代においてすでにインドシナ半島や東南アジア・インド・アラビア等の各地と航路を開き、国際都市として賑わったのが広州であるが、中国で最初に市舶司(市舶使)が置かれた(於、唐代)のもこの地であったようだ¹¹⁾。以後、歴代の皇帝は当地に必ず市舶司を置き、海上貿易の事務を行わせた。前述の清の乾隆帝でさえ、広州の市舶司だけは廃止せず、当代唯一の対外貿易港とした。

かつて数千の船が停泊したという広州の港は、今、白鵝潭といい、珠江(全長2100km。沙面～江口150km)が二流に分岐する所(江幅10m)にあり(写真4)、その埠頭は沙面(22万㎡・東西900m・南北300m)という出島になっていた。明代にはここに華節亭があったというが、今はなく、清代(1861年以降)英仏の租界として専用されたころの面影をとどめているにすぎない。つまり、当時の歐風の洋館が立ち並ぶのみだからである。ちなみに、明代建立の鎮海楼は、市街地北部の丘上(越秀公園)に現存し、朱塗りの五層から成るその建物は、偉容を誇っている(図3)。

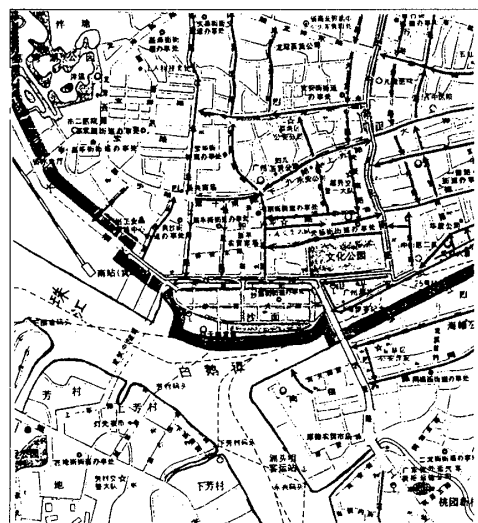


図3 広州市街図

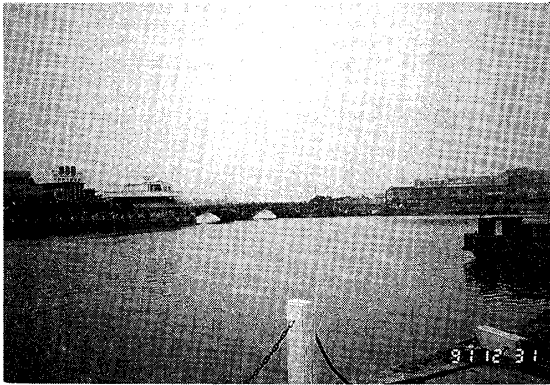


写真1 旧寧波港

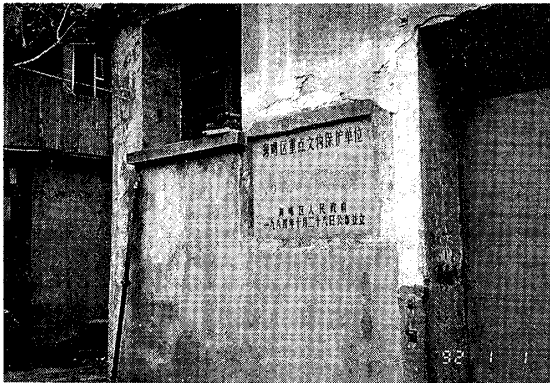


写真2 寧波高麗使館跡



写真3 泉州天妃宮



写真4 広州旧港
(沙面より望む白鵝潭)

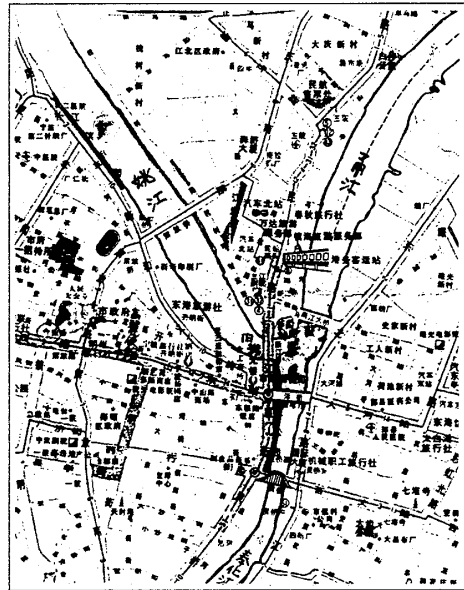


図1 寧波市街図

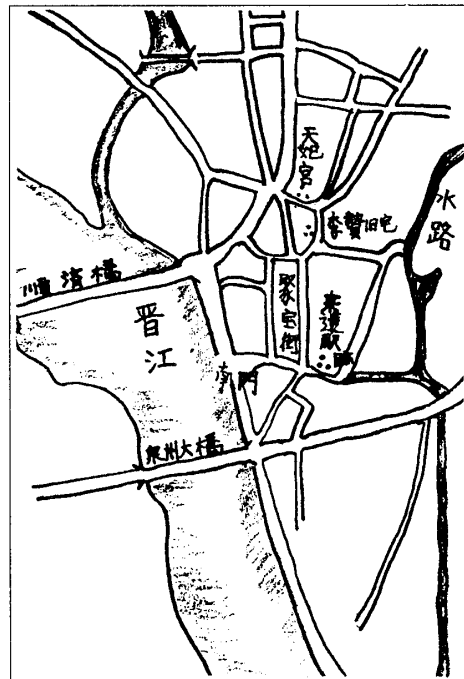


図2 泉州市街図

以上のように、中国は、海路、アジア・アフリカの各地と交易していたのであるが、これよりさらに古く（漢・唐代）、陸路、ヨーロッパや北アフリカに至る各地と交易していたのである。いわゆる陸・海のこのシルクロードをとおして、ヨーロッパやアフリカ・アジア各地の文化や文物が中国にもたらされたのも周知のところである。中国は、いわば巨大な国際的交易国家である。

ところで、このような中国が正式に沖縄（琉球）に朝貢をうながしたのは、周知のように、1372年で、このことは、沖縄の正史にも記されている。たとえば、『中山世譜』巻三には、明の太祖・洪武帝が同年（洪武5年）行人・楊載を遣わせて琉球に詔（みことり）を送ったことが記され、その詔が引用されている。

その詔書には、17年間の長きにわたる戦闘の末、漸く元を滅ぼし、大明国をうち建て、年号を洪武と改めたこと、建国以来、使者を送った諸外国が陸続と入貢していること、琉球は海外の遠隔の地で、建国の報知が遅れたことなどを記して、朝貢を促している（注13、参照）。

琉球中山王察度は、この詔を受諾し、弟の泰期を中国へ派遣し、洪武帝に表（表箋）を奉り、方物を貢じている。これをうけて、洪武帝は大統暦と金織文綺・紗羅を察度王に頒賜し、泰期にも衣幣を与える。こうして、琉球は、完全に中国の藩属となり、以後、明治7年（1874）に至るまで、中国へ入貢するのである（翌明治8年、明治政府により厳禁）。

『明太祖実録』によれば、洪武帝が使者泰期をとおして、中山王察度に頒賜したのは、同年12月であるが、それは洪武帝の即位（1368年1月）からまる5年も経過したのちのことで、上掲の詔書が記すように、琉球がいかにか海外の遠処であったとしても、やはり当時の琉球は、後年とは異なり、さほど重視されてはいなかったのである。洪武帝にとっては、地続きの異国・朝鮮（高麗）との友好が先決であり、次いで、当時既に猛威をふるいはじめていた倭寇対策のためにも、日本との正式の国交が必要だったようである。

『皇明資治通紀』洪武元年11月の条に「遣使頒詔諭安南・占城・高麗・日本各四夷君長」とあり、『皇明実録』洪武2年2月の条に、「遣吳用顔・宗魯・楊載等、使占城・爪哇・日本等国」という記事のあるのは、既に指摘がある¹²⁾が、上掲の『明太祖実録』（以下『明実録』と表記）に拠って、洪武帝の諸国に対する招諭（朝貢を促すこと）の経過を示せば、次のようになる。

1368年（洪武1） 12月、高麗王を招諭（使者＝招諭使・僉斯）。同日、安南招諭（使者・易濟）

1369年（洪武2） 1月、日本・占城・爪哇・西洋諸国（南洋諸島）に使者を送り招諭。

1370年（洪武3） 6月、雲南・八番（今の貴州省辺り）・西域（チベット）・西洋瑣里（チョーラ）・爪哇（ジャワ）・畏吾兒（ウイグル）に使者を送り招諭。

8月、暹邏（シャム）招諭（使者・呂宗俊）。

同月、三仏齊（バレンバン）を招諭（使者・趙述）。淳泥（ボルネオ）を招諭（使者・張敬之）。真臘を招諭（使者・郭微）。

1372年（洪武5） 1月、琉球を招諭（使者・楊載）¹³⁾。

これによって明らかなように、洪武帝は、朝鮮や日本、インドシナ半島や東南アジアの諸国、雲南やチベットを招諭したのち、琉球へ使者を送っているのである。周辺の主要な諸国に使者をはせたのち、近隣国のうちでは、いわば最後に琉球を招諭している。不征国（征伐に値しない国）のうちでも、琉球は最も小国だったのだ。

さて、上記で注目すべきは、洪武帝が日本と琉球へ同じ使者を派遣していることである。日本への招諭については、いくつかのすぐれた研究があるが、今、田中建夫博士の考説¹⁴⁾に従っていえば、洪武帝が最初に日本へ使者を派遣したのは、洪武元年（1368）11月。だがこの時の使者は五島辺りで賊に殺害されたという。次いでこの使者が、のち沖縄へ来た行人・楊載である。行人とは、賓客を掌る官吏。翌洪武2年、九州へ上陸した楊載らは、太宰府にいた南朝方の征西將軍懷良親王に、詔書を呈したが、使者一行（7人）のうち、5人が斬殺され、楊載らは3ヶ月間拘留されたという。彼らの持参した「日本国王」宛の詔書には、朝貢を促すと同時に、倭寇の取締りを強く要請し、実行しない場合は、日本を攻撃して国王を捕縛すると記している。懷良親王は、この詔に激怒したのであろう。

3度目の使者遣秩が来日したのは翌洪武3年。「日本国王」に再度入貢を促したので、征西將軍府は、翌洪武4年、僧祖来らを使者と共に派遣して洪武帝に馬と方物を贈り、倭寇が捕えた中国人70人余を送還する。かくて洪武帝は大統暦と文綺紗羅を頒賜し、洪武5年、この大統暦を持った使者2名を懷良親王の許へ派遣するが、博多一帯は北朝方の今川了俊（九州探題）の支配下にあつて、懷良に会えず、使者は目的を果たせぬまま、洪武7年（1375）帰国したという。こうして、一たん中断した日明の国交が再び開かれたのは、足利義満（中国では永楽帝）の時代である。

以上の日明交渉は、主として『明実録』に拠ったもので、今日では通説ともなっているが、指摘しておきたいのは、最近、台湾大学教授曾永和氏が、行人楊載について、新説を呈していることである¹⁵⁾。氏は、嘉靖期（16世紀）の鄭若曾の『鄭開陽雜著』巻7「琉球図説」や、王圻撰『続文献通考』巻235「四裔考、東南夷琉球」の記事を根拠に、楊載は日本からの帰途、琉球へ立ち寄ったとする。さらに、胡翰（字・仲子）の『胡仲子集』（洪武14年初刻）巻五所載の「贈楊載序」をあげ、『明実録』をも参照しつつ、洪武2年2月、命を受けて日本へ派遣され、呉文華とともに3ヶ月間拘留された楊載は、同年一たん帰国。翌3年3月、3度目に派遣された使者・趙秩に随行して日本へ渡り、翌洪武4年、日本の使者祖来を伴って帰国する途中、琉球へ寄港し、同年10月帰着して洪武帝に謁した折、当時の琉球の実情を報告したのであろうという。この報告が契機となり、洪武帝は琉球に対する認識を変え、翌洪武5年1月、楊載を使者に任じ、琉球を招諭させたという。そして、この琉球招諭の究極的な原因は、倭寇に対する防備を図り、琉球産の良馬を得るためだったとしている。

上掲資料のうち鄭若曾と王圻の叙述に不明瞭な部分もあるが¹⁶⁾、以上の曾氏の説は、旧説を超えた肯綮に当たる指摘である。

沖縄に階級社会が出現し、按司という土豪が城塞（グスク）を築いて一定の地域を支配するようになった、11～12世紀以降（宋・元代）すでに沖縄では、中国との私的な交易が頻繁に行われていた。日本も同様で、例えば、博多綱首で知られる中国商人が、11世紀末には博多にチャイナタウン（大唐街）を形成していた。曾氏の指摘によれば、北宋時代すでに琉球には、中国商人の館やその他の国の館が海辺に設置されていたという。中国・日

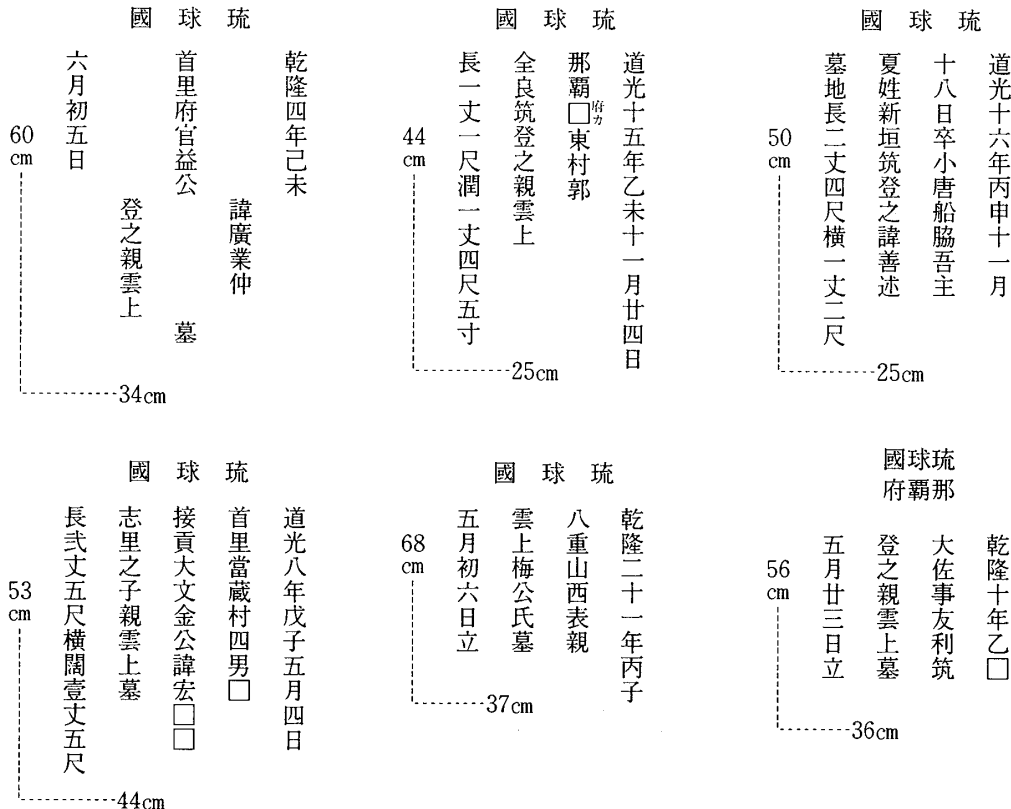
本・琉球・朝鮮（新羅）は、東シナ海をはさんで、一つの通商圏を形成していたのである。

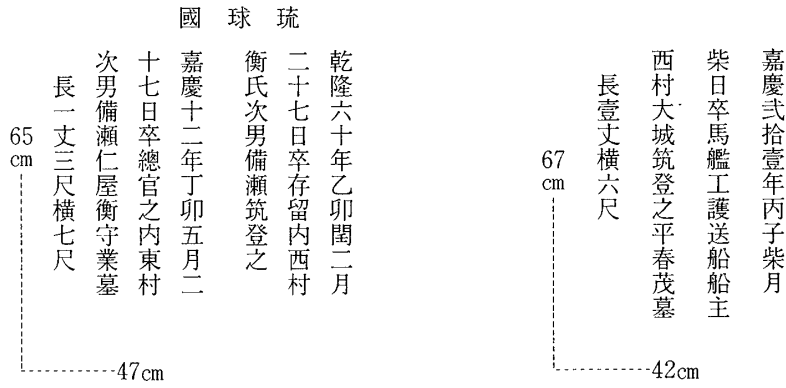
明の洪武帝は、琉球のこのような経済的政治的位置を知り、民間レベルで行われるこの交易（貿易）を官営化し、琉球をその支配下に置くために、琉球を招諭したのであろう。琉球側も亦、中国に藩属することによって王国としての地位が国際的に確保され、その通商も朝貢貿易の形態をとることによって、公認・保護されたのである。こうして、洪武5年以後、およそ500年間にわたって、中・琉の進貢・冊封外交が展開されたのは、前にもふれたとおりである。

ただ、周知のように、招諭使楊載来琉のころは、三山分立の時代で、中国はこれら三国に共に朝貢を促した。ために、いわば、三国の進貢合戦が展開され、小葉田淳教授の詳細な調査によれば、明代の洪武・永楽年間だけでも、進貢・謝恩・慶賀の朝貢は、全体で中山74回、南山30回、北山17回に及んでいる¹⁷⁾。加えて、洪熙・宣徳以降（尚巴志の三山統一=1416年北山王滅亡・1429年南山王滅亡）清代にわたって、およそ240回の朝貢があり、この500年間に中国へ渡航した琉球人は、じつに、20万人にのぼるとい¹⁸⁾。現地で死去した琉球人も多く、福州だけでも下記のような銘のある琉球人墓（12基）の存在を確認することができる。

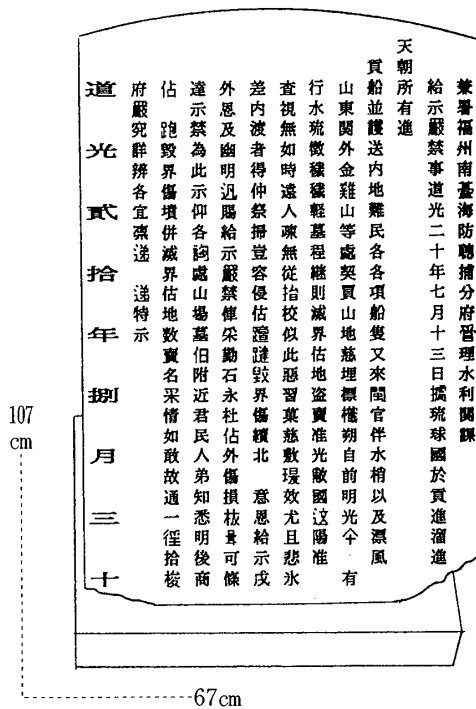
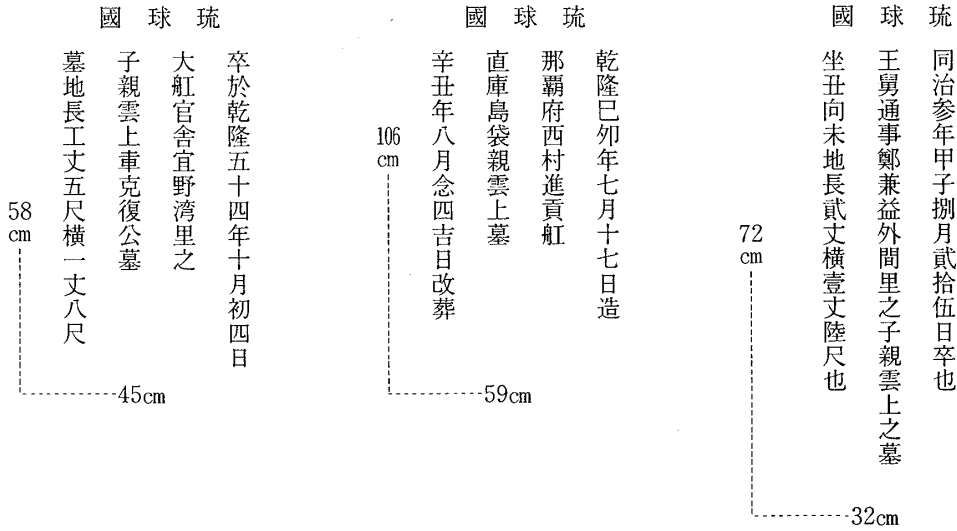
ただ、1963年、中国側の調査で、80基を確認したという琉球人墓も、福建師範大学の徐恭生教授によると、現在では、上記12基のほか、福州文管会に24基、福建師範大学に5基、泉州海外交通博物館に1基、平潭県文化館に4基、淮陰県図書館に2基が残されているだけだとい¹⁹⁾。

〔福州倉山・琉球墓園の墓碑〕





[福建省博物館所蔵墓碑]



察度王が中国に初めて朝貢して (1372) から洪武帝の崩御する (1398・洪武31) までの26年間、中山国はほとんど毎年のように中国へ朝貢している (ただし、洪武6, 7, 14, 22の4年間欠)。小葉田教授の前述の指摘によると、その回数は35回。1380年 (洪武13) 初入貢 (中山世譜では1383年) の南山国では14回、1383年 (洪武16) 初入貢の北山国では11回朝貢している。琉球は働き蟻のようにせっせと貢物を運んでいたことになる。もちろん、それに見合う洪武帝の頒賜と貿易のうま味はあったのであろうが。

殊に中山は積極的で、その甲斐あって、1376年 (洪武9) には、洪武帝が直接使者・李浩をおくり、馬と硫黄を買いつけ、いわば国家間の直接的な商取り引き (貿易) を成功させ、1385年 (洪武18) には、船をもらっている。もっとも、同年、南山も船を下賜されているが、中山察度の積極外交に比べるとはるかに立ち遅れている。察度王は、さらに、1392年 (洪武25) かねてから念願し、洪武帝に要請していた、子弟の国子監入学を成功させ、また、下賜された閩人36姓を帰化させることによって、中国の制度や文物を積極的に摂取し、法治国家としての王国体制を固めている (中山世譜)。

因みに、国子監は、かの難関、科挙に合格した者のみが入学できる中国の最高学府である (276年創建)。元・明・清の三朝にわたる学舎の遺構が北京にそのまま残っており、これについては、すでに琉球新報 (1993年9月18日・20日付) に報告したが、このような太学^{たいがく}へ琉球人の子弟を入学させ一定期間修学させるという留学制度を発足させたことは、驚くべき成果で、察度王が先進国の学問や思想・文化をいかに積極的に摂取しようとしていたかがわかる。後年、新井白石が国子監卒業の琉球人に羨望の眼差しを向けたのも当然である。

なお、かつて琉球に対し消極的だった洪武帝が、積極策に転じているのも注目すべきで、上記のほか、1383年 (洪武16)、使者梁民・路謙に詔書を持たせて派遣し、三国王 (察度・承察度・怕尼芝) に対し、抗争をやめるよう戒めている。また、留学生を南山から招聘していることも積極策のひとつとしてよいだろう。

こうして、琉球は、中国との関係を密接にしたのであるが、洪武帝の死後、即位した建文帝の時代 (1399-1402) には、中国の兵乱のため国交が絶え、1403 (永楽1)、新たに即位した成祖・永楽帝は、同年、改めて琉球を招諭し、翌年、使者行人・時中を派遣して、察度の子・武寧を中山王に封じた。使者は不明だが、同年4月、承察度の従弟・汪応祖も南山王に封じられている。

これが、琉球への冊封使派遣の最初であるが、以後、1866年 (同治5) に至るまで、総計、中山へ23回、南山へ2回、冊封使が派遣されている。武寧王以下の中山王 (第一・第二尚氏) についていえば、若年で死去した尚賢王 (1625-1647) ・尚益王 (1678-1712) と、尚澎王 (1787-1838) の三代以外は、すべて中国皇帝の冊封を受けている。中国は500年にわたって、藩属国琉球に対して、宗主国としての礼をとった (義務を果たした) のである。

冊封使来琉については、すでに多くの研究があるが、敢えて、その来航年や冊封使名・滞在期間等を図示すれば、次表のようになる。

明末から清代の冊封使の記録 (冊封使録) によれば、1~2隻の船に乗船して来航する、冊封使とその随員の数は、多い時で400~500名にのぼり、次表でも明らかなようにその滞

在は、4～8ヶ月に及んでいる。18世紀頃の王府が経済的負担に耐えられず悲鳴をあげたのも当然である。

また冊封船の規模も次表の中では、最も大きな船で長さ62.2m、幅18.66m、深さ15.55mである。日本の旧練習船・日本丸（長97m・幅12.95）に比べると、その全長は3分の2であるが、逆に幅は5mも広い。スマートな練習船より、ちんぐりとした型の貨物船に似た帆船だったと考えてよい。

中国の造船技術は、古くから大型船を建造できる高度なものであったらしく、たとえば、最近広州の中山四路から発掘された、秦・漢時代の造船所の遺跡から長さ100m以上、幅約18mの大型船の船底基骨（木造）が発見されている。その遺物は、広州博物館（旧・鎮海楼）に保管されているが、同館の説明によると、秦代から西漢前期に至る頃（BC214-BC111）、すでに広州は、海外交易港として発展しており、この頃に建造された船だという。同館には、1978年、広州の六榕路鉄局巷から出土した、長さ5m余の巨大な鉄錨もあった。明代のものだという。

また、1974年、泉州の後渚港から出土した商船は、長さ24.20m、幅9.15mで、3層から成り、宋代に海外貿易船として使用されたものだという。沈没船を引揚げたものようであるが、船中に香料・薬物・木牌・貨籤・陶磁器が積載されていたという（福建省博物館・展示説明による）。

冊封船は、鄭和が西征に使用した巨大船（およそ長さ133.3m、幅54.5m）には、到底及ばないが、この泉州の商船よりは、少なくとも長さが8m以上大きな船であったことがわかる。中型船とすべきであろうか。

ところで、洪武帝の派遣した使者（楊載・李浩・梁民・路謙など）と冊封使は、どのようなコースをたどって琉球へきたのであろうか。

この問題について、充分なる解答を示すことは不可能に近い。なぜなら、楊載以下、1479年来琉の冊封使までは、使録がなく、しかも、現存する使録でさえ、行路未記載のものがあるからである。したがって、管見の及ぶ範囲で、使録からその事例を示す以外、方法はないが、ただ、極めて大ざっぱに言えば、洪武年間、主都南京から江南の国際港へ至り、そこから海路、東シナ海を渡り、沖縄へ至ったのはまちがいない。永楽帝以降は主都が北京へ移されたので、陸路が当然一部変更されたはずである。

南京または北京から華南の国際港へ至るのも、当時すでに所定の駅路が開かれていたはずであるが、未考である。前述の曾氏の論文に引用された、李復（宋代の進士）の『澗水集』の記事は、宋代に泉州から高華嶼・龜巖嶼を経て「琉求」へ至る商船の海路を示しており、冊封船の航路についても一つのヒントを与えてくれる。

この記事は、沖縄に、中国とそれ以外の国（おそらく日本や南蛮）の商館が立ち並び、当時すでに沖縄が中継貿易地として発展しはじめていた様相を記して貴重であるが、経由地の2島は、明らかに隋書からの引用である。

洪武・永楽から成化初期に至る期間も、中国の使者は、泉州を出発し、おそらく上記のような海路を経て沖縄へ至ったと思われるが、今、その確かな資料を示し得ないのが遺憾である。さらに言えば、使者たちの到着した、当時の沖縄の港はどこであろうか。15世紀半ば、漸く那覇港が整備されたことを考えれば、中山城下の牧港とすべきが妥当ではある

冊封使來琉年表

来琉年	冊封を琉球王受けた	冊封正使(官名)	冊封副使(官名)	冊			封		船	滞在期間	主な使録
				長さ	長さ	長さ	幅	深さ			
1404 永楽2	武寧(中山)	時中(行人)									
1404 同	汪志祖(南山)	時中(行人)カ									
1407 永楽5	尚思紹										
1415 永楽13	他魯每(南山)	陳季芳(行人)									
1425 洪熙1	尚巴志	柴山(中官)	阮								
1443 正統8	尚忠	余忭(給事中)	劉遜(行人)								
1448 正統13	尚思達	陳伝(給事中)	万祥(行人)								
1452 景泰3	尚金福	陳謨(左給事中)	董守宏(行人)								
1456 景泰7	尚泰久	李秉彝(右給事中)	劉儉(行人)								
1463 天順7	尚徳	潘榮(吏科右給事中)	蔡哲(行人)								
1472 成化8	尚円	官栄(兵科給事中)	韓文(行人)								
1479 成化15	尚真	董旻(兵科給事中)	張祥(行人司司副)								
1534 嘉靖13	尚清	陳侃(吏科左給事中)	高澄(行人)	新造	17丈	3丈1尺6寸	1丈3尺3寸	5.25-9.20		使琉球録	
1561 嘉靖40	尚元	郭汝霖(吏科左給事中)	李際春(行人)	新造	15丈	2丈9尺7寸	1丈4尺	閏5.9-10.18		使琉球録	
1579 万曆7	尚永	蕭崇業(戸科左給事中)	謝杰(行人)	新造	14丈	2丈9尺	1丈4尺	6.5-10.24		使琉球録	
1606 万曆34	尚寧	夏子陽(兵科右給事中)	王士慎(行人)	新造	15丈	3丈1尺6寸	1丈3尺3寸	6.1-10.21		使琉球録	
1633 崇禎6	尚豊	杜三策(戸科左給事中)	楊倫(行人司司正)	新造	20丈	6丈	5丈	6.9-11.9		杜天使冊封琉球真記奇観	
1663 康熙2	尚質	張学礼(兵科副理官)	王珙(行人)	新造	18丈	2丈2尺	2丈3尺	6.25-11.14		使琉球記・中山紀略	
1683 康熙22	尚貞	汪楫(翰林院檢討)	林麟焜(内閣中書舍人)	軍艦	15丈余	2丈6尺	不明	6.26-11.24		使琉球雜録	
1719 康熙58	尚敬	海宝(翰林院檢討)	徐栄光(翰林院編修)	商船	10丈	2丈8尺	1丈5尺	6.1-翌年2.16		中山伝信録	
1756 乾隆21	尚穆	全魁(翰林院侍講)	周煌(翰林院編修)	民船	11丈5尺	2丈7尺5寸	1丈4尺	7.8-翌年1.30		琉球国志略	
1800 嘉慶5	尚温	趙文楷(翰林院修撰)	李鼎元(内閣中書舍人)					5.12-11.2		使琉球記	
1808 嘉慶13	尚顯	齊鯤(翰林院編修)	費錫章(工科給事中)					5.17-10.5		統琉球国志略	
1838 道光18	尚育	林鴻年(翰林院修撰)	高人鑑(翰林院編修)					5.9-10.20		統琉球国志略	
1866 同治5	尚泰	趙新(詹事府右贊善)	于光甲(内閣中書舍人)					6.22-11.18		統琉球国志略	

※『中山世譜』および各冊封使録を参考に作成した。
1丈=明代3・11m 清代3・2m (角川・漢和辞典)

るまいか。

さらにいえば、洪武年間、ほとんど毎年のように、泉州へ赴いた琉球の使者やその随行者たちを中国では誰が指揮・監督したかも不明である。洪武帝は、初め江蘇の太倉・黄波に設けた市舶司を洪武3年(1370)廃止して、前述の3港に移したが、琉球の進貢が活発化する洪武7年(1374)にはこれを停止し、漸く再設されたのは、永楽帝即位の1403年だからである。

この再設を米倉二郎氏は、「琉球入貢のため」としているが²⁰⁾、永楽帝は、朝貢・貿易・遠征の便を図って市舶司を再設したのであろう。市舶司は正しくは提挙市舶司といい、内外の貿易船に関する一切の事務を管理する官衙である。その長官を提挙市舶といった(市舶は内外の貿易船。互市舶とも)。『福建市舶提挙司志』によれば、市舶司の官員(差人)が進貢使一行を北京まで案内し、帰国の途につくまで面倒をみているようである。

王連茂氏(泉州海外交通史博物館長)によると、明代初期、泉州に市舶司が設置され、これが福州へ移転されるまでの100年間、泉州は琉球との経済・文化交流の主役をなした地だとい²¹⁾が、おそらくこのような貿易関係の官衙や組織も福州移転後の方がより充実されたようである。

この頃から提挙市舶や冊封使の記録が書かれるようになるのも、このことと深く関係しているはずである。

ところで、前掲の『福建市舶司提挙司志』(高岐輯)に、初めて、琉球進貢使が福州から北京へたどった行程の概略と進貢後の措置などが記されている。一部を引けば、次のとおりである。

自柔遠駅起程、往芋源駅由延平・建寧・崇安、過山浙江、直抵北京。

琉球国差来夷使人伴赴北京、進貢事畢回還奉欽、依差鴻臚寺序班一員、防送至柔遠駅。文中の柔遠駅²²⁾は、いうまでもなく、琉球人(ほか外国人)の居留地。芋源駅はどうにもその位置を確認できないが、厦門の三五会社の調査にかかる『福建事情第二回実査報告』²³⁾によると、延平・建寧は共に府名で、延平府の中に今日もその名を残す尤溪县や南平県があり、建寧府には建陽県や崇安県がある。この崇安は建寧府の最北の町。山とは、福建省と浙江省の境にある高峯の山岳をさしているのはまちがいない。台湾総督府刊『福州攷』²⁴⁾によると、民国時代には、このルートを建安道といい、古来、杭州へ抜ける街道の一つであったことがわかる。

つまり、進貢使たちは、閩江上流の建溪・崇陽溪に沿って、南平・建瓯・建陽・崇安へとけわしい山道をさかのぼり、黄崗山(2158m)を左に見つつ省境の山嶺を越えて浙江省に入っている。のちの建瓯から右折し、浦城を経て楓嶺関を越える、仙霞嶺越えの道とは別のルートである。いずれのルートをたどっても、富春江上流に至る。以後は、この江に沿って杭州へくだり、そこから京杭運河をさかのぼって、北京へ至ったものと考えられる。

今、京杭運河の跡を訪ねてみると、じつに世界最長の大運河で、杭州市街の北にあるその埠頭は、船舶と旅客で賑わっている。ここからおよそ350kmさかのぼると鎮江に至り、広大な揚子江を渡ると揚州に至る。著名な鑑真和上が日本へ向けて船出した地であるが、その市街地の東方に南北に向けて真直ぐにこの京杭大運河が走っている。運河の幅約1km。

連絡船や貨物船が頻繁に往来し、岸辺に無数の水上生活者(蜑民)の木造船が舳られていた(1992年8月10日訪)。

ここからさらに淮陰・徐州・濟寧・德州など山東省の都市を繋ぎながら天津に至る。実際に利用されているのは、通県辺りまでだが、運河跡は、じつ到北京・紫禁城の東方3kmのところまで続いている。ただ、北京のそれは改修工事が施され、水量も激減して往昔の面影は全くない(後掲の写真参照)。

欧陽洪著『京杭運河工程史考』²⁵⁾によると、この京杭運河は、世界最古にして最長の大運河で、河北・山東・江蘇・浙江の4省と海河・黄河・淮河・長江・錢塘江の5大水系を縦貫し、全長1789kmに及ぶ人工の水路。春秋時代に工事が始まり、歴代開鑿が進められ、隋・元兩代に大規模な工事が行われて完成したという。実際には、次の8つの運河で構成されている。

通惠河(北京東便門—通県, 約20km)

北運河(通県—天津, 約160km)

河北南運河(天津—臨清, 484km)

会通河(臨清—黄河北岸, 120km)

山東南運河(黄河南岸—台兒庄, 295km)

中運河(台兒庄—淮陰・揚庄, 191km)

里運河(淮陰・揚庄—揚州・瓜洲, 175km)

江南運河(鎮江—杭州, 344km)

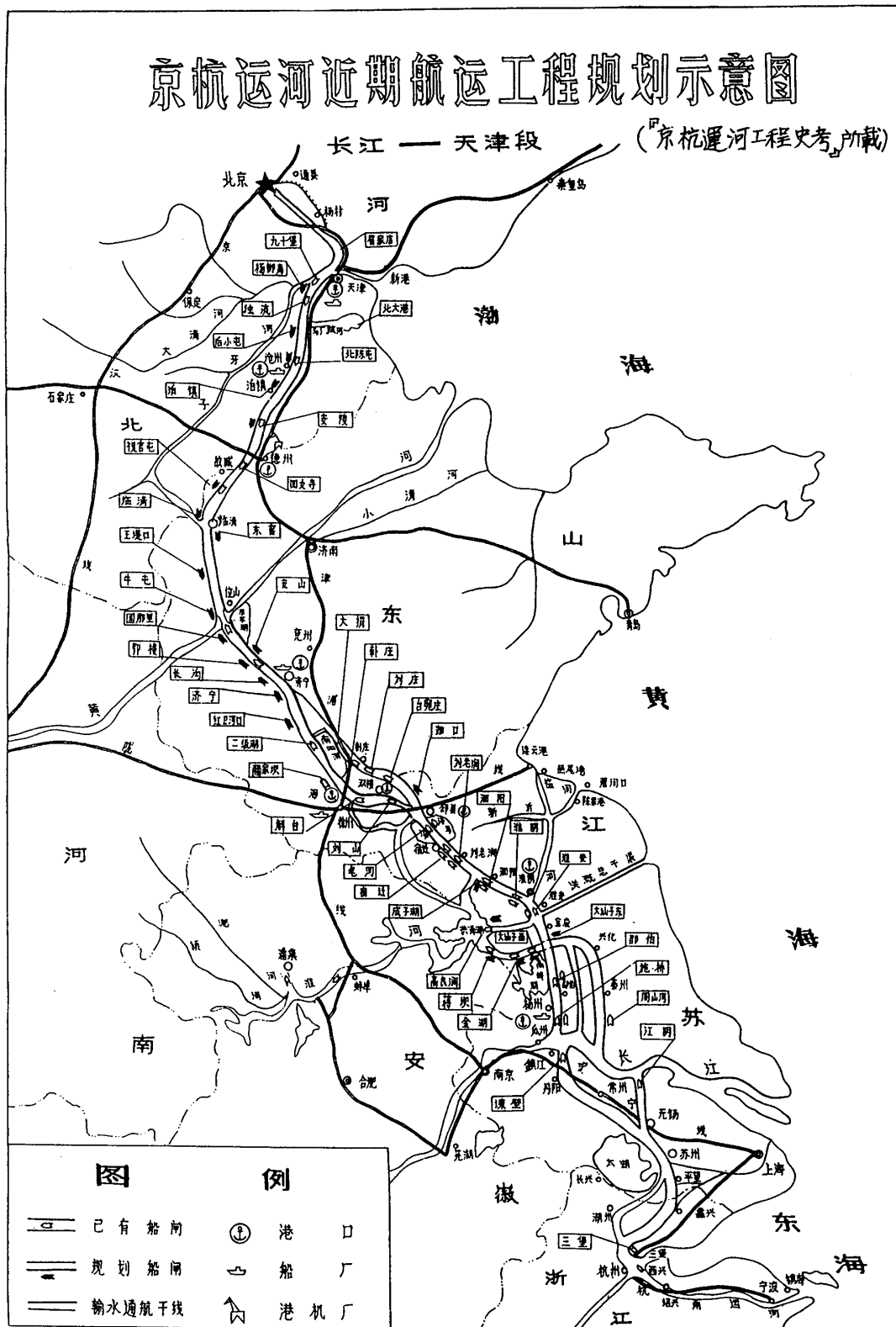
琉球への使節団・冊封使一行も、主としてこの運河をたどり、杭州から山越えで、福建省に入ったものと思われる。

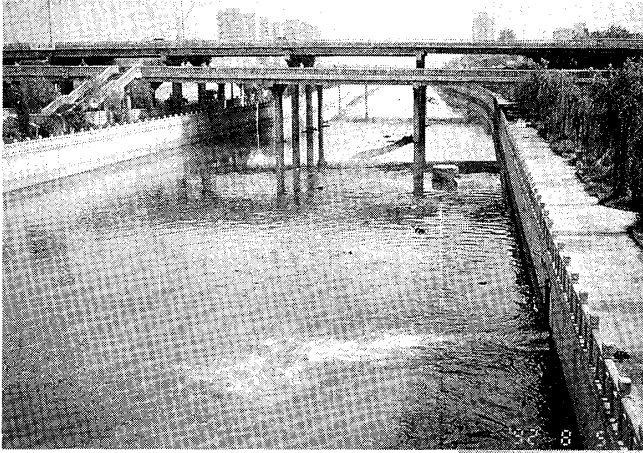
ここでは、以上を記すにとどめる。冊封使のたどった陸路や海路については、次号で詳説する。(1993年8月25日脱稿・同年9月末補記)

京杭运河近期航运工程规划示意图

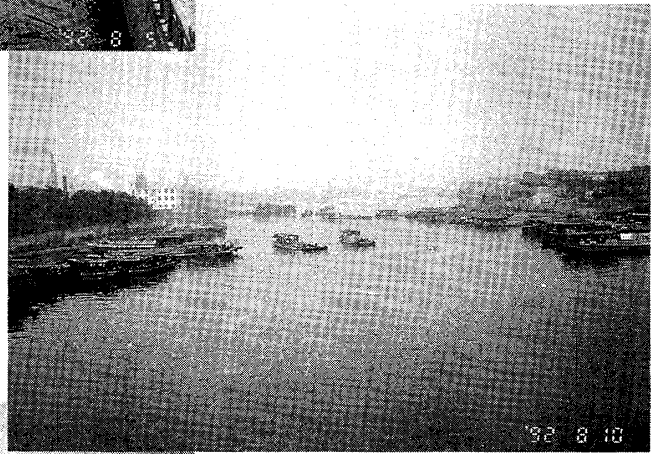
长江—天津段

(《京杭运河工程史考》所载)

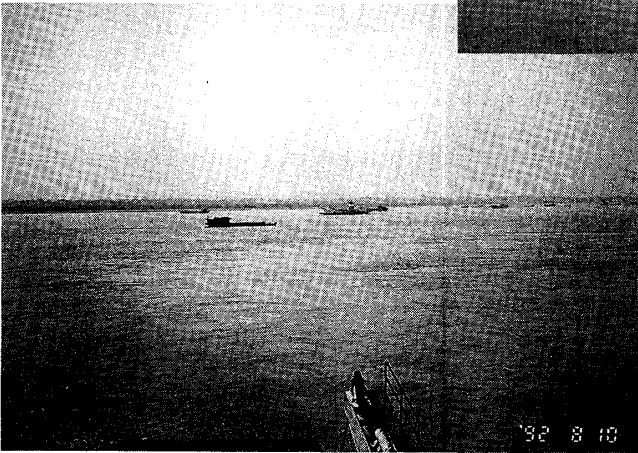




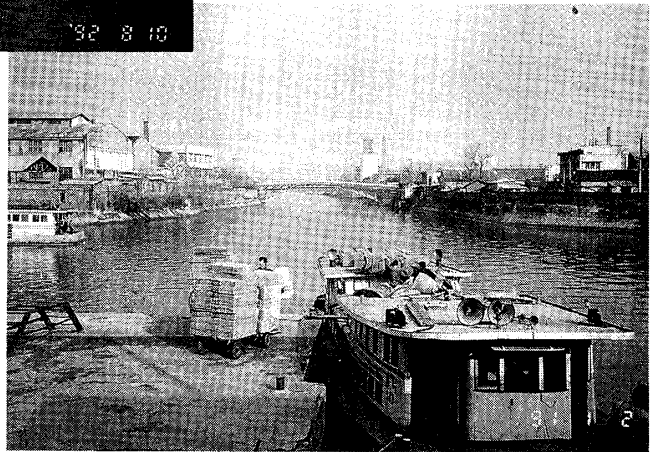
北京・通惠河



揚州・運河大橋より大運河を望む



揚子江 (揚州→鎮江)



杭州・大運河の埠頭 (終着点)

注

1. 家蔵の寛文元年刊の和刻本（版本・全8冊）に拠った。
2. 前注と同本の巻四に拠った。ただし、明らかに誤りと思われる個所を下記のように改めた。
「比^レ於^レ藩臣^ニ」→「比^ス於^レ藩臣^ニ」
3. 前掲の文中にある「瑣里」・「白葛達」の現称地名、未考。『西洋朝貢典録』（明、黄雀曾撰）によれば、明代に朝貢した南方諸島は、次の23か国。占城（チャンパ・現ベトナム）・真臘・爪哇（ジャワ）・三仏齊（バレンバン）・満刺加（マラッカ）・淳泥（ボルネオ）・蘇祿・彭亨・琉球・暹羅（シャム）・阿魯（アルー）・蘇門答刺・南淳里（ランプリ）・溜山（モルデイブ）・錫蘭山（セイロン）・榜葛刺（ベンガル）・小葛蘭（クイロン）・阿枝（コーチン）・古里・祖法児（ズファール）・忽魯謨斯（ホルムズ）・阿丹（アデン）・天方（メッカ）
4. 貧農の身分から出て漢民族国家を再建した明の太祖・洪武帝は、建国の功臣ら（胡准庸・李善長・徐達・藍玉）を次々に殺し、自己の王子には3000人～2万人に近い衛兵をつけて帝室を助けさせ、専制的暗国政治を行なったことが指摘されている。
次帝は太祖の孫にあたる建文帝であるが、伯父の燕王は帝位を篡奪して、皇帝となった。これが成祖・永楽帝であるが、彼もまた、建文帝の顧問・朱子学者方孝孺を惨殺し、親戚・知人・門人等数百人を死刑に処して、父同様、専制的政治を断行したことが指摘されている。
なお、明代皇帝の巨大な権力は、実見した南京の明孝陵（洪武帝陵）や北京のいわゆる十三陵（永楽帝の長陵はじめ歴代の明国皇帝の十三の陵。万暦帝の定陵のみ発掘公開）の規模の広大さや巨大な地下宮殿の建造物、副葬品の豪華さなどに象徴されていることを付記しておきたい。
5. 俞福海・方平編著『浙東名城—寧波』1985年海洋出版社刊（於、北京）。
6. 寧波には、国家指定の重要文物が3個所（余姚河姆渡遺跡・保国寺・天一閣）、省指定9、市指定16、県指定級のものが81個所あるという。これも県級のものであろう。標示板に次のようにある。

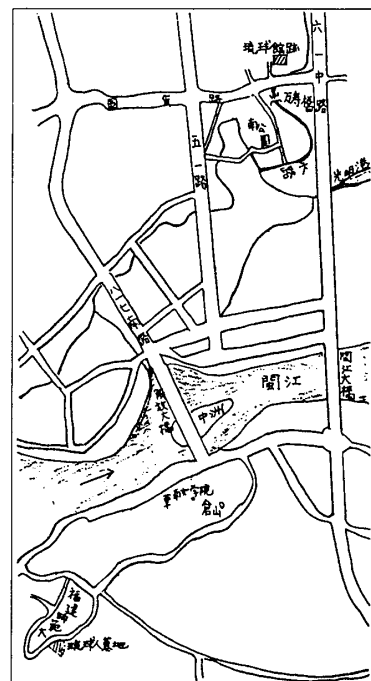
海曙区重点文物保护单位
高麗使館遺址
海曙区人民政府
一九八四年十月二十八日公布並立

- なお、上記の場所は、三江合流地点から西方の鼓樓（海曙樓）に向かう途中にある。県前街北側。
7. 泉州市委員会文史資料研究委員会編『泉州文史資料』第一輯（1986年9月刊、於、泉州）・清淨寺発行「伊斯蘭在泉州」ほか参照。
なお、泉州には、中国最古のイスラム教寺院・清淨寺（1009年創建）やイスラム教徒の墓が靈山にある。キリスト教の教会（プロテスタント）は聚宝街に2個所あるのを確認した。
 8. 史蹟標示（石造）は、方形で縦90cm、横40cm。背面無記。表面に縦書で次のように記載されている。

明来遠駅遺址
泉州市文物管理委員会
公元一九八四年六月 日立

- なお、前述の旧泉州港の位置については、海辺にある現泉州港が波荒く木造船の停泊に不向きなこと、外人居留地や天妃宮の位置から見ても、市街南部の晋江と考えるのが妥当である。ちなみに桑原隲蔵博士も Hirth の説を引き、同地を旧港に比定している（『蒲寿庚の事蹟』）。
9. 1991年広東科技出版社刊。
 10. 『唐大和上東征伝』による。広州を描いた次の記事がある。
又有^レ婆羅門寺三所^ニ。並梵僧居住。池有^レ青蓮華^ニ。華葉根莖並芬馥奇異。江中有^レ婆羅門波斯崑崙等船^ニ。不知^レ其数^ニ。並載^レ香藥珍宝^ニ。積載如山。其船深六七丈。師子国大石国骨唐国白蛮赤蛮等往来居住。種類極多。
（師子国＝現スリランカ、大石国＝アラビア、骨唐国＝タタール。白蛮・赤蛮、未考）
 11. 高岐編輯の『福建市舶提学司志』（後序に「嘉靖乙卯秋七月望吉」とある）に唐代に右威衛中郎であった人物（周澤）が市舶使になった（初代か）とあり、また同じ唐代の広徳元年（763）、広州に市舶使・呂太一がいたと記している。長沢和俊氏によれば、市舶司は最初、官庁はなく開元2年（714）以後、官職名として、市舶使または押蕃舶使と称したという（『海のシルクロード史』p.110）。

12. 小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』参照。
13. 『明太祖実録』巻七一・洪武五年正月の条に下記の記載がある。『中山世譜』巻三・察度王紀・洪武五年の条もこの『明実録』を史料としているのがわかる。
遣楊載持詔諭琉球国。詔曰、皇帝王之治天下、凡日月所照、無有遠邇、一視同仁。故中国奠安、四夷得所、非有意於臣服之也。自元政不綱、天下兵争者十有七年。朕起布衣、開基江左、命將四征不庭。西平漢主陳友諒、東縛吳王張士誠、南平閩越、戡定巴蜀、北清幽燕、奠安華夏、復我中国之旧疆。朕為臣民推戴、即皇帝位、定有天下之号曰大明、建元洪武。是用遣使外夷、播告朕意。使者所至、蛮夷酋長称臣入貢。惟爾琉球在中国東南、遠処海外、未及報知。茲特遣使往諭、爾其知之。
14. 田中建夫著『倭寇一海の歴史』参照。
15. 曹永和(外間みどり訳)「明洪武朝の中琉関係」(1992年12月発行「浦添市立図書館紀要」No. 4, 所載)
16. 上掲の『鄭開陽雜著』に「明洪武初、行人楊載使日本、帰道琉球遂招之。」とあり、『続文献通考』にも「皇明洪武初、三王遣使朝貢。壬子、行人楊載使日本、帰道琉球、遂招之。」とあるが、この表現では、「日本へ派遣された楊載が帰途、琉球へ寄り、直ちに琉球王を招諭したので、王は朝貢に及んだ」と読める。
17. 前注12に同じ。
18. 徐恭生「琉球人墓群と中琉文化交流」(1988年12月、浦添市教育委員会発行『琉球—中国交流史をさぐる』所収)参照。ただし、この数は、高良倉吉氏の推計によるもの。
19. 徐恭生「中国琉球墓調査情況」(1992年10月刊、沖縄県立博物館編『琉球王国』所収)参照。
なお、琉球人墓の調査の経緯については、前注18の文献でもふれられている。
次掲の墓碑の調査年月日は、下記のとおり。
福州倉山・琉球墓園…1990年12月29日初訪、1992年8月13日再訪。
福建省博物館…1991年1月1日初訪、1992年8月12日再訪。
20. 「福州の琉球館」(『地球』22巻1号)
21. 王連茂「泉州と琉球」(前注18, 記載書所収)。
22. 福州の柔遠駅は、『福建省舶提挙司志』付載の地図によると、城府の外にあったのは明らかで、四周に塀をめぐらせ、南北に門を設け、中央に館があったようである。近くの水路にかかる万寿橋(現存)の東方に天妃宮があり、その周辺に貢物庫・貢廠・庫房・提挙司堂・宴待夷人堂などがあった。柔遠駅一帯の地名を河口という。今、河口には、僅かに万寿橋だけが残され、史蹟として保護されている(1983年、福州市人民政府指定)。市街の南を東西に走る国貨路の近くにあり、周辺は「南公園」になっている。国貨路をへだて200mほど北に入ったところに柔遠駅の跡がある。のち琉球人専用の宿館(琉球館)となったが、全くその遺構はなく福州第二開闢廠という工場になっている。以下は万寿橋の史蹟標示。
河口万寿橋俗称小万寿橋鼓山和尚成源募建橋為石構二墩孔平梁撐架式長三十五米寬三米。橋頭有万寿庵和清康熙九年(一六七〇年)《河口万寿橋》碑及鼓山北丘道需題「万寿橋」三字石刻。碑為清初「三藩」重要史料。現移立于山九仙觀碑廊。橋旁伝為琉球等国貢船及人員駐洞之所。付近有琉球館。河口天后宮等是福州海外交通史重要遺迹。(原文縦書)
23. 明治42年(1909)~大正2年(1913)8月の現地調査をまとめたもの。大正3年、三五公司発行。法政大学図書館所蔵。
24. 昭和12年(1937)8月、台湾総督府熱帯産業調査会刊。法政大学図書館所蔵。
25. 1988年12月、江蘇省航海学会刊。



福州市略図